

## パール・バック夫妻と渡米後の林語堂

—— 林と*Asia*, ジョン・ディ社, 「東西協会」との関わりを手掛かりに ——

範 麗 雅

### はじめに

林語堂 (1895-1976 年) は、渡米前の 1928 年 11 月から 36 年 8 月までの間、中国沿岸部の開港地に住む外国人コミュニティの読者層向けに刊行されていた英文週刊誌 *The China Critic* (週刊, 1928-46 年) で活躍していた。この間の 33 年 10 月頃、彼は上海で、1938 年度のノーベル文学賞受賞者であるアメリカの女流作家パール・バック Pearl S. Buck (1892-1973 年) と、後に彼女の二番目の夫となる *Asia* (月刊, 1917-46 年) の編集長であり、ジョン・ディ出版社の社長でもあるリチャード・ウォルシュ Richard Walsh (1891-1960 年) の知遇を得て、1935 年、アメリカで *My Country and My People* (『中国＝文化と思想』, 以下 *My Country* と略す) を出版した。この本は、英語圏の文芸界に高く評価され、林はその成功の追い風に乗って、1936 年 8 月、一家で渡米した<sup>①</sup>。

*My Country*によって林は、無名の一中国人作家から、アメリカの文芸界の主流に仲間入りを果たした。しかし、その反面、渡米以降の彼の英文執筆活動における題材の選択や創作の方向は、バック夫妻を中心とするアメリカの読書界や出版界からの影響と制約を受けざるを得なくなった。このような状況は、*My Country*に寄せた林の序文に端的に示されている<sup>②</sup>。さらに興味深いのは、渡米後の林が、国内の友人宛てに近況報告をした手紙である<sup>③</sup>。

その中で林は、生活の芸術について本を書いていると言っているが、それは渡米早々、2 冊目のベストセラー *The Importance of Living* (1937 年, 『人生をいかに生きるか』, 以下 *The Importance* と略す) の執筆に着手し始めたことを意味する。ところが実際は、米国到着直後の林は、著書の執筆だけではなく、*New York Times* や *Asia* を中心としたアメリカの主要な新聞や雑誌においても健筆を揮っていた。そしてその一方、家族旅行のため、または、ヨーロッパで開催された国際作家会議に出席するため、アメリカを留守にする時も多く、実に多忙を極める日々を過ごしていた。

林一家が渡米した 1930 年代は、中国にとっても、国際社会にとっても、受難の時代であった。国際社会では、ヒトラーが一方向的にヴェルサイユ条約を破棄し、ドイツ軍を再武装して、ラインラントとスデーテンラント (ドイツ系住民が住む旧チェコスロバキア領の一部) へ進駐したことによって、ヨーロッパ諸国に戦争勃発の危機感を与えていた。

一方、中国国内では、1937 年 7 月に「盧溝橋事変」が起こり、これを機に、日中戦争の戦禍が次第に中国全土に拡大していった。日中全面戦争が、上海をはじめとする中国沿岸

部の開港地における欧米諸国の利権を大きく脅かしたため、この時から、中国問題に対する欧米諸国の関心が一気に高まったのも不思議ではなかった。このような緊迫した国際情勢の最中、米国到着からまだ数ヶ月も経っていなかった林語堂は、アメリカのマス・メディアにとって、英語圏の国民の間で日増しに高まりつつある中国問題への関心に的確な解答を与えることのできる願ってもない人物であった<sup>(4)</sup>。このように、米国のメディアで目覚しい活躍ぶりを示す一方、林は、*The Importance*を皮切りに、*The Wisdom of Confucius* (1938年)、*Moment in Peking: A Novel of Contemporary Chinese Life* (1939年、『北京好日』或いは『悠々の北京』、以下*Moment in Peking*と略す) など、長編小説や東方の知恵を説く4冊の儒家・道家の古典英訳といった力作を次々に出版したのである。

こうした渡米後の林の旺盛な著述活動を支えていた基盤が、バック夫妻の主宰した雑誌*Asia*, ジョン・ディ社, 「東西協会」East and West Association (1942年3月-46年12月)の「三位一体」であった。中でも雑誌*Asia*は、バック自身も述べていたように、戦時中のアメリカ人のアジア理解において、重要な役割を果たした媒体であった<sup>(5)</sup>。近年、*Asia*を取り上げて、林語堂をはじめ中国、日本、インドなどのアジア系著述家によるアジア理解促進のための執筆活動と、バック夫妻の彼らへの援助の様相を明らかにする研究書が、中国語圏、英語圏で相次いで出版された<sup>(6)</sup>。しかし、管見では、これらの先行研究は、バック夫妻から林への支援の考察に偏り、*Asia*での執筆・編集の活動や「東西協会」主宰の様々な文化的・社会的な活動に林自身がいかに関与したのか、またそれが、上述の力作の出版で、戦時中の英語圏における林語堂の高い評価にどのように繋がっていったのか、という点についての考察と分析が不十分であったことは否めない<sup>(7)</sup>。そこで本稿は、バック夫妻主宰の*Asia*, ジョン・ディ社, 「東西協会」などの文化的・社会的活動への林語堂の関わりに焦点を当て、夫妻がどのように林の文筆活動を手厚く応援したか、そして、林自身はそれにどう対応したのかを解き明かすことを目指す。

そのために、まず、バック夫妻の異文化交流の中心拠点であり、渡米後の林語堂の活動基盤ともなった*Asia*が、いったいどのような雑誌だったのかを解説しておきたい。

## 1. パール・バック夫妻と*Asia*

*Asia*は、1917年1月にアメリカの領事ウィラード・ストレイト Willard D. Straight (1880-1918年)によって、北京で創刊された観光雑誌である。バックがまだ中国に在任していた頃、この雑誌にいくつかのエッセイや短編小説を寄稿している<sup>(8)</sup>。この雑誌は、いわば彼女の文学活動の出発点であり、*Asia*に対して、バックが特別な思いを抱いていたであろうことは想像に難くない。後にバックは、自伝の中で、エルムハースト夫妻<sup>(9)</sup>から*Asia*を譲り受けて発行を続けてきたこと、また、同誌が戦時中のアメリカのメディアの中で、アジアの国々に関する報道において重要な位置を占めていたこと、および廃刊するまでの

経緯などを、以下のように長い文面を割いて詳細に語っている。

わたしの最初の作品はそこで発表されたし、この雑誌にはセンチメンタルな興味もあって、わたしは時々執筆していた。しかし読者は、この雑誌の価値にふさわしいほど多くはなかった。アメリカ人はアジアには興味をもてないように思えた。

優秀な水準を保ちつづけた雑誌ながら、幾年もの間には、年間出費も大きくなり、金持ちでなければそれを続けられなくなってきていた。

ストレイト氏が死んだ後は、未亡人がその後を受け継いだが、後にレオナード・エルムハースト氏と結婚してからも発行が続けられた。

私の夫が編集していた時代は、雑誌の水準を落とさずに、出費も徐々に少くされたが、読者の数はそう増加はしなかった。前途にたちはだかる避けられない不安にもかかわらず、アジアの人たちに興味をもっているアメリカ人は、一万五千人か二万位しかいないように思われた。

こんなことが、実際にあっていいのだろうか？ 私にはあり得ないことのように思われた。そして一九四一年、エルムハースト氏がこの雑誌をやめる決心をしたとき、夫と私はこれを続刊して、どれだけこの小さな読者の興味が増大していくか、ためして見ようと考えた。

当時、アジア人の生活について全面的に論評し、そして信頼のおける情報をのせていた雑誌は他になかった。アメリカ国民にかねらの安全と幸福にとって基本的ともいえる知識を供給している最後の手段を閉ざしてしまうのは、馬鹿げたことのように思われた。

私にとって、それは伝道者のような衝動であり、夫もそれを分ち合っていた。私たちは是が非でもやらねばならぬという野望に燃えて、エルムハースト未亡人に激励されながら雑誌とその資産一切を譲りうけた。それから五年間、戦後ある事件が起って発行を止めざるを得なくなるまで、私たちの手で雑誌が続けられたことを、ここに説明するだけでも十分だろう<sup>(10)</sup>。

*Asia* に対するこのような深い愛情を抱いたからこそ、バックは、米国に帰国した 1934 年 1 月に、当時、同誌の編集長に就任したばかりのリチャード・ウォルシュから、雑誌の主要な編集者兼執筆者としての誘いを受けてそれを快諾したのである。それだけではなく、バックはウォルシュのために、林語堂やスノー Edgar Parks Snow (1905-72 年) 夫妻なども含め、東アジアの国々の政治、外交、文化に精通するアジア系や欧米系の著述家を多数スカウトしてきた。

ウォルシュは早速、「共産主義も美術と同様に客観的に眺め、宗教的概念も経済問題と同様に、偏見なく取り扱う」<sup>(11)</sup> という新しい編集方針を打ち出し、*Asia* を観光雑誌から厳粛なメディアに育てあげようと決意したのである。事務所も北京から、ジョン・ディ出版

社のあるニューヨークの建物に移転した。同誌の執筆陣営に加わったバックは、書評欄(*Asia Book-Shelf*)の編集者兼主要寄稿者として活躍を始めた。こうして*Asia*は、有能なりベラル派の編集長のもとで、バックや林語堂などのアジア文化の理解者であり、なおかつ博識で才能豊かな多くの執筆者を獲得することになる。そして、30年代から戦後にかけて、軽薄な一娯楽雑誌から脱皮し、重厚な報道と情報分析を求める英語圏の読者を対象に、専門家によるアジア諸国の政治・外交・文化・芸術・国民生活を解説する専門誌として、アメリカのマス・メディア界に華々しく登場したのである。

1941年、バック夫妻はこの雑誌を買収し、翌年の4月から*Asia and the Americas*と改名、夫妻が設立した「東西協会」——アジア諸国の国民とアメリカ国民との相互理解を促進することを趣旨とする民間財団——の機関誌とした。

しかし、第二次世界大戦が終盤を迎えようとする1945年頃、アメリカ国民のアジアに対する関心は薄れ、それに伴い、これまで*Asia*を支援してきた広告主やスポンサーがどんどん離れて、*Asia*は財政危機に追い込まれた。夫妻は雑誌を廃刊の危機から救うために、大規模な募金活動を行ったものの、結局、米ソ対立という国際政治情勢の激変に逆らうことはできなかった。また、バック夫妻は、1934年以来の編集方針を堅持したため、*Asia*は米国政府によって、「新共産主義の雑誌」というレッテルを貼られた。パール・バックは何度もFBIから取り調べを受けた。こうした政治・経済からの逆風に晒された*Asia*は、結局、財政難から抜け出せず、1946年12月号を出した後、廃刊せざるを得なくなった<sup>(12)</sup>。

*Asia*は、戦時中から戦後にかけて、アメリカとアジア諸国の政治、外交および文化の交流を促進し、アメリカ国民とアジア諸国の国民との間の理解を深めたことで、極めて重要な役割を果たした。しかし、英語圏の文芸界に対する同誌の最大の貢献は、何と云っても、バックや林語堂のような、世界文壇に名を馳せたコスモポリタンの著述家を数多く送り出したという点であろう<sup>(13)</sup>。とりわけ林語堂は、まさにこの*Asia*を出発点として、*My Country*をもってアメリカも含む英語圏の読書界で成功を収め、そして世界文壇へと踏み出したと言っても過言ではない。

## 2. 林語堂と*Asia*

林語堂の名前が最初にアメリカの読者に知られたのは、*The China Critic*の*The Little Critic*というコラムに寄稿したエッセイが、1934年6月号の*Asia*に転載された時からであった。以来、同誌が廃刊するまでに、林は23篇のエッセイ、6篇の書評、1篇の映画評論など計30篇の文章を寄稿した。これらの中で、“*The Qualities of the Chinese Mind*” (1934年12月号)、“*The Virtues of an Old People*,” “*A Tray of Loose Sands*,” (35年2月号と8月号)、“*Can the Old Culture Save Us?*” “*We Share the World Heritage*” (36年4月号と5月号)の5篇は、後に*My Country*の第2章や第7章に収録された。*My Country*が歓

迎を受けた点から考えると、林は渡米する前から、*Asia*を通して、英語圏の読者層に既に親しまれていたと推測することもできる。さらに、林が渡米後に寄稿した“The Vagabond Scholar” (37年11月号) や“The Birth of New China” (39年3月号) といったエッセイ・英訳は、そのまま、*The Importance* の第11章第2節や増訂版 *My Country* の第10章などに織り込まれた。そして、1942年4月、林は、改名後の *Asia and the Americas* に所属する6名の Contributing Editors の中の一人に選ばれた。それによって彼は、この雑誌の執筆・編集、ジョン・ディ社の宣伝・広告活動、そして、「東西協会」が立ち上げた様々な文化交流のプロジェクトにより深く関わるようになった。

林語堂が海外で出版した30冊余りの英文著述のうち、ジョン・ディ社(あるいは、ジョン・ディ社の名義) から出されたものは、*My Country* や *The Importance* を含め13冊にも上る。これらの著述が出版された際、バック夫妻は、必ず *Asia* の誌面上の最も読者の目を引く頁で、大きな広告を打ち出している。例えば、1939年12月号の *Asia* の2頁目の誌面において、“JOHN DAY Books that bring you authentic aspects of the ORIENT” (大文字と斜体は原文) という広告文の下には、*My Country*, *The Importance*, *Moment in Peking* が、バックの小説や他のアメリカ人著述家とともに並べられている<sup>(14)</sup>。

1942年4月、「東西協会」が作成したアメリカ人読者向けの「戦時中の中国図書一覧表」にも、上記の3冊のベストセラーが載せられている。1943年4月号には、ジョン・ディ社から出された「東洋についての四大小説」という広告においても、林が1940年に出版した小説、*A Leaf in the Storm* (『嵐の中の葉]) はトップを飾る<sup>(15)</sup>。その一方、バック自身は、林の著書を高く評価する書評を *Asia* の書評欄に数多く寄稿した<sup>(16)</sup>。1938年度のノーベル文学賞の受賞者であり、米国の文芸界で売れっ子作家でもあったバックの書評が、米国の読書界における林語堂の知名度を上げたと言えよう。

なお、こうした書評や広告による宣伝活動に限らず、バック夫妻は、アメリカ文壇における名声と人脈を活かして、林の著書の人気をアメリカのエリート知識人層から一般の中産階級までに広げようと、さらなる宣伝戦略を打ち出した。それは、20世紀の30年代、アメリカの中産階級を多数抱えていた最大の読者団体——「今月の推薦図書クラブ」The Book-of-the-Month Club に林の著書の推薦を働きかけることであった。

### 3. 林語堂とジョン・ディ社、「今月の推薦図書クラブ」

「今月の推薦図書クラブ」は、ハリー・シャーマン Harry Scherman (1887-1969年) というベンチャー投資家によって1926年に創立された。これは、20世紀のアメリカ大衆の読書傾向を大きく左右する民間団体であった。このクラブの文学顧問を務めたヘンリー・セイデル・キャンビー Henry Seidel Canby (1878-1961年、選考委員会の委員長)、ウィリアム・アレン・ホワイト William Allen White (1868-1944年)、ドロシー・キャンフィールド・フ

イッシャー Dorothy Canfield Fisher (1879-1958年), クリストファー・モーレイ Christopher Morley (1890-1957年), ヘイウッド・キャンベル・ブラウン Heywood Campbell Broun (1888-1939年) は、大衆作家やジャーナリストとして、当時の米国のメディアで良く知られていた人物であった。林語堂は、渡米後の *The Importance, On the Wisdom of America* (1950年) といった英文著述の中で、彼らの著作を頻繁に引用している。

「今月の推薦図書クラブ」設立当初の会員は、わずか4,750名だったが、後にニューヨーク社交界に打って出て、新しい会員の獲得に成功した。その結果、一年以内に会員は6万名に増加し、1929年までに11万名以上に達したという。大恐慌で一時的に会員数が減少したが、1930年代の後半には入会者が再び増え、1930年代の終わりには会員が36万名を超えた。この読書クラブは、1928年以降、カナダ支部もヨーロッパ支部も設立された。従って会員は北米に限らず、英語圏、フランス語圏、ドイツ語圏の国々までに広がったと考えられる。

米国内の選考委員会の仕事と連携するために、また、出版界・読書界における国際的知名度を高めるために、クラブは、1929年2月に国際選考顧問委員会 (Foreign Advisory Committee) を設立した。選考委員には、イギリスのウェルズ H. G. Wells (1866-1946年)、ドイツのトーマス・マン Thomas Mann (1875-1955年, 38年にアメリカ亡命)、フランスのアン Dre・マルロー Andre Malraux (1901-76年) などが名を連ねている<sup>(17)</sup>。

先述の通り、渡米後の林語堂は、必ずしも長期間ずっとアメリカに定住したわけではない。1938年から、彼は二度にわたってヨーロッパへ赴いた。それは、恐らくヨーロッパでの生活費が安かったという理由以外に、この年の3月、パリで開催された反ファシズム国際作家会議に出席するという、もう一つの理由も考えられる。林が会議中にこれらの文化人と語りあい、親交を深めたことも推測がつく。というのは、翌年の5月9日に国際ペンクラブの大会がニューヨークで開催されたとき、林は、ウェルズ、マン、マルローなどと共に出席し、ファシズム批判の講演を行ったからである。そして、同じ年、文芸評論家のクリフトン・ファディマン Clifton Fadiman (1904-99年) の編集により、ウェルズ、マン、バック、林語堂などをはじめ、23名の欧米の著名な文化人が自身の信念や主張を語るエッセイ集を出版したことも、林とこれらの文化人との交友関係を裏付けている<sup>(18)</sup>。

なお、<sup>ごうやまきわむ</sup>合山究氏の調査や林の娘たちの回想によれば、林は、1939年3月号の*Asia*に寄稿する評論“The Birth of New China”をパリで完成しており、*Moment in Peking*の構想もパリで練り上げたという<sup>(19)</sup>。周知の通り、林はこの小説を構想する際、中国古典小説『紅樓夢』の枠組みを参考にしたほか、近代西洋小説、とくに、彼と親交のあるマンの長編家族小説『ブッデンブローク家の人々 — ある家族の没落』*Buddenbrooks. Verfall einer Familie* (1901年) からの影響を受けた痕跡も見受けられる<sup>(20)</sup>。これらの点からも、林は、この読書クラブとの関わりを持つことによって、アメリカだけではなく、ヨーロッパの文化界との間にも、広い交友関係を結んだと言えよう。

ところで、「今月の推薦図書クラブ」は、いったい、どのような選考方法で図書を選出したのだろうか。それは、キャンビーを中心とする選考委員会の委員たちが、毎月何百もの新しい出版物の中から1冊を選び出し、その面白さを大々的に宣伝したパンフレットと共に、それをクラブの会員たちに配布するといった方法である。この方法で選ばれた著書とその著者は、まるで「宝籤」に当たったような名誉と実利を両方、手に入れることができる。幸運にも、林語堂は二度にわたってこの「栄冠」を手に入れたのである。

1939年1月29日付けの*New York Times Book Review*の広告によれば、*The Importance*の売れ行きはこの日までに26万部、そのうち25万部は、「今月の推薦図書クラブ」の売り上げの数字である。つまり、この読書クラブの約7割の会員たちが、林の著書を購入した計算になる。後に、*The Importance*はフランス語やドイツ語に訳され、林はこの書物によって世界的な名声を博することになった。実はその裏で、この読書クラブを通じた林と欧米の文化界との広い交友関係や、クラブの会員たちのネットワークの広さと強さが大きく作用したのではないかと思われる。

なお、30年代の後半から、バック夫妻が*The Importance*と*Moment in Peking*を、「今月の推薦図書クラブ」の審査員たちに強力に推薦した以外に、林語堂も、自ら進んで積極的に、この読書クラブが企画した図書の広告・宣伝活動に携わるようになった。例えば、1938年1月15日からの連続10週間、林はニューヨーク公共放送(WQXR)というラジオ局で、バックやファディマンと一緒に、新刊本を紹介する番組に出演した。その時、林が紹介したのは、キャンビーが編集した*The Works of Thoreau* (1937年)であった<sup>(21)</sup>。

いずれにしても、20世紀の30年代、英語圏の国々の出版社から出されたフィクションやノン・フィクションの本は、この読書クラブのリストに載せられることによってアメリカの読書市場に注目され、それが大量の売り上げの保証と、大衆出版市場での成功とに繋がったのである。戦時中、ジョン・ディ社の二人の看板作家である林語堂とバックが出した著書は、次々と「今月の推薦図書クラブ」の選定図書に選ばれた。それによって、本の売れ行きが大きく伸び、ジョン・ディ社の財政が二人の著述でだいぶ潤ったことは想像がつく。30年代初期に、一弱小出版社として出発したジョン・ディ社は、こうして二人の売れっ子作家を抱えて、米国出版界の中堅へと徐々に成長していったのである<sup>(22)</sup>。

以上、書評、広告、そして「今月の推薦図書クラブ」への働きかけなど様々な広告・宣伝活動から、バック夫妻がいかに力を惜しまず、渡米後の林語堂の英文著述活動を応援してきたかを検証してきた。そして、林語堂は当然、こうした夫妻からの熱い応援と期待に対し、全力を尽くして応えたと思われる。

#### 4. 林語堂と「東西協会」

林は、バック夫妻の応援と期待に応えるべく、「東西協会」が企画したアメリカ人とアジ

ア諸国の国民との相互理解を促進するための、文化・芸術・教育など各種の交流プログラムに積極的に携わっていた。

筆者の調査によれば、林は1942年4月、ウエンデル・ウィルキー Wendell L. Willkie (1892-1944年)<sup>(23)</sup>, ジョン・デューイ John Dewey (1895-1952年, アメリカ哲学会会長), オーエン・ラティモア Owen Lattimore (1900-89年)<sup>(24)</sup>, ミルドレッド・マカフィー Mildred H. McAfee (1900-94年, ウェルズリー女子大の学長), トーマス・ラモント Thomas W. Lamont (1870-1948年, IBM 社社長), エルバート・トーマス Elbert D. Thomas (1883-1953年, 上院議員) などのアメリカの政治界・経済界・文化界の著名人とともに、「東西協会」設立当初の顧問委員会 (Advisory Board) の一員に選ばれた<sup>(25)</sup>。

ちなみにこの時、*Time* (週刊, 1923-)、*Life* (写真週刊誌, 1936-)、*Fortune* (半月刊, 1930-) などの人気誌の創刊者として、戦時中の米国のマス・メディアに君臨したヘンリー・ルース Henry R. Ruce (1898-1967年) が、同協会理事会の理事を務めていた<sup>(26)</sup>。従って、渡米後の林とルースとは、「東西協会」の活動を通して親しくなったことが考えられる (この点については後述する)。

なお林は、「東西協会」の顧問委員のほか、バック夫妻が同協会の活動の一環として1942年5月に設立した「中国・インド友好協会」The Friendship of India and China の主要なメンバーとしても活躍していた<sup>(27)</sup>。この年の5月号の*Asia*は、「インド特集号」であり、林は、戦時中の駐米大使・胡適 (1891-1962年) とともに、古代インド文化が中国文化に与えた影響を讃える文章をこの特集号に寄稿した<sup>(28)</sup>。翌年の11月から、林とバックはともに、「米国インド人連盟」The India League of America の名誉会長に選ばれた<sup>(29)</sup>。そして、日中戦争が中国全土に拡大していったさなか、在米中の林一家は、「東西協会」の文化活動のみならず、バック夫妻やルースらが抗戦中の中国に対する医療物資支援のために立ち上げた「中国緊急救済委員会」China Emergency Relief Committee と「中国救助連合」United China Relief との募金活動、そして、60年以上にも及んだ「中国移民制限法の撤廃を訴える市民委員会」Citizens Committee to Repeal Chinese Exclusion<sup>(30)</sup> の署名活動など、様々な社会活動にも精力的に参加するようになった<sup>(31)</sup>。

ところで、「東西協会」が企画した各種の文化交流プログラムの中で、林とその家族が深く関わったのは、「読書プロジェクト」Reading Project と、「中国へ手紙を送るプロジェクト」“Letters to China” Project という二つのプログラムであった。

「読書プロジェクト」は、書籍を通して、アメリカ国民がアジア諸国の文化をより深く理解するためのものである。このプロジェクトは、アジア諸国の一般国民に向けた、専門家による「アジアの人々がアメリカ人を知るための必要な書籍」BOOKS ABOUT AMERICANS FOR PEOPLE IN ASIA TO READ (大文字原文, 以下同じ) の推薦、そして、アメリカ人の大人向けの書籍推薦 —— 「*Asia* が推薦する中国に関する図書一覧表」ASIA'S READING LIST ON CHINA<sup>(32)</sup> と、アメリカ人の子供向けの書籍推薦 —— 「中国とインド —— 東洋を教えるこ



とに向けて」CHINA AND INDIA: TOWARD TEACHING ABOUT THE ORIENT など、アメリカからアジアへ、アジアからアメリカへという二つの方向に分けて実行された<sup>(33)</sup>。

バックは、文学作品がアメリカ人とアジア諸国民との相互理解を深めるための格好な材料だと考え、「東西協会」発足当初から、国籍や人種を超えた読書プロジェクトを実行し始めた。彼女は、まずアメリカを知るために読むべき本の推薦を、カール・ヴァン・ドレーン Carl Van Doren (1885-1950年, *The New York Herald Tribune*), キャンビー (*The Saturday Review of Literature*), ファディマン (*The New Yorker*), キヤサリン・ウッズ Katherine Woods (1886-1973年, *New York Times Book Review*) などのアメリカの主要雑誌・新聞の書評家や著述家に呼びかけた。キャンビーらは、この呼びかけに真剣に対応し、アメリカ人とその文化を、他国の国民に紹介するのに適切だと判断した本を推薦するのみならず、なぜ、これらの本を選んだのかという理由も付け加えた。アメリカの文化と歴史を他国民に紹介するに際してのモデルとして、これらの書評家が林の *My Country* を挙げたことは注目に値する<sup>(34)</sup>。

一方、1941年12月に日本軍が真珠湾を攻撃し、第二次世界大戦の戦火がアジア・太平洋地域に拡大したことによって、アメリカから、アジア各地に派遣される米軍兵士や民間人の数が急増した。そのため、アジアを知る需要も一層高まってきた。こうした国内外の需要に応えるために、バック夫妻は、中国も含むアジアの国々を知るのに必要な書籍を推薦する「図書推薦委員会」を発足させた。林語堂は、「東西協会」の「異文化交流部門の主席」Chairman of the Intercultural Committee of the Associationとして、また、この図書推薦委員会の重要な委員として、ナサニエル・ペッフアー Nathaniel Peffer (1890-1964年) とともに、ニューヨーク市の教育委員会と協力しながら、大人読者向けの中国図書一覧表や子供向けの教育プログラムの作成に取り組んだ。*My Country, The Importance, Moment in Peking* が、中国の歴史・文化・芸術・国民生活を紹介するための最も優れた「ガイドブック」として、この図書一覧表や教育プログラムに盛り込まれた。

次に、この「読書プロジェクト」とほぼ同時に進行したのが、米中両国の民間人による手紙交換の企画であった。このプログラムは、後述する国民政府軍人委員長・蒋介石の夫人、宋美齡<sup>(35)</sup> が、1942年11月から43年5月までの訪米中、特に、43年2月18日にアメリカ議会において行なった演説によって高まった親中ブームの中で企画されたものであった。

企画の発案者はバックだったが<sup>(36)</sup>、実際に初めから終わりまで、その実務に携わったのは、林語堂とその家族であった。林は1943年10月頃、まず、音楽を中心にバラエティ番組を放送する WABC やコロンビア放送網 (Nation-Wide Columbia Network) といったラジオ局<sup>(37)</sup> で、北米大陸の一般の人々に向けて、中国国民宛ての手紙を書いてほしい、と呼びかけた。この放送の終了後、アメリカ人やカナダ人から、およそ、500通余りの手紙が林の手元に届けられた。これらの手紙の書き手は、家庭の主婦、鉄道職員、農民から弁護士、ビジネスマン、大学総長までのあらゆる階層、大人から子供までの各年齢層に属する人々、即ち、

バックが「東西協会」設立宣言の中で定義した「一般の国民」ordinary peoples であった。

ラジオ局での呼びかけ以外にも、林とバック夫妻は、宋美齡の訪米がもたらした親中ムードの中で、「東西協会」によって作られ、全米の各州にも支部が設けられた「アメリカにおける中国クラブ」China Clubs in America<sup>(38)</sup> といった民間団体に対しても、手紙の執筆を要請した。その結果、1943年11月頃、林が戦時中の重慶へ出発するまでに、およそ1,600通を超える手紙が、さらに彼の手元に送られてきた。1943年11月の初め、林一家はこれらの手紙を重慶に持ち帰った。11月4日、これらの手紙は、まず重慶の中国国際放送の短波で放送され、翌日の『大公報』でも報道された<sup>(39)</sup>。翌年の春、林一家がアメリカに戻った際、今度は、中国の一般国民が書いた返信をアメリカに持ち帰った。そして、44年の4月11日に、林は再び、前出のコロンビア放送網の「国への報告」Report to the Nation という番組に出演し、中国から持ち帰った一般の中国国民が書いた手紙をいくつか紹介した。これで、米中両国民による手紙交換のプロジェクトがめでたく終了した<sup>(40)</sup>。

## 5. 林語堂と「東西協会」をめぐる人々

渡米後の林と一家は、バック夫妻が主宰したAsia, ジョン・ディ社, 「東西協会」などと深い関わりを持つだけでなく、夫妻の交友関係の内側と外側に位置するアメリカの知識人のあいだにも、広い人脈を築き上げた。次女・林太乙<sup>りんたいいつ</sup>の伝記によれば、林はバック夫妻を通して、36年から戦後にかけて、ニューヨーク在住の劇作家、文芸評論家、映画監督、音楽家、ジャーナリスト、出版人など、アメリカの文化界・芸術界におけるエリート知識人との間に親密な交友関係を結んだという<sup>(41)</sup>。なかでも、林と同じくキリスト教長老派牧師家庭の出身であり、中国で生まれたヘンリー・ルースとの親交は特筆に値する<sup>(42)</sup>。つまり、戦時中のアメリカにおける林語堂の著述の人気を高めた外在的な要因の一つは、ルースのタイム社が経営した前出の3誌による、「良い中国像」の創出である<sup>(43)</sup>。3誌の中で、1923年に創刊されたTimeは、30年代後半には、既にアメリカの中産階級読者の間に浸透し、今日に至って、世界で500万に近い部数を誇るアメリカの代表的な週刊誌となった。戦時中、中華民国の実力者である蔣介石の肖像と、その夫人・宋美齡の肖像、または、蔣夫妻一緒にいる肖像が、合わせてなんと12回も、この雑誌や写真誌Lifeの表紙を飾っている<sup>(44)</sup>。これは、アメリカのみならず、英語圏全体のメディア史上においても前例のないことであった。しかしながら、タイム社の「良い中国像」の創出における最大のイベントは、やはり1942年11月から翌年の5月までの宋美齡訪米であった。

宋美齡は、幼少時から大人になるまで、アメリカの名門女子大学で教育を受けて、流暢な英語を操り、才気と美貌を持ち合わせる中国のファースト・レディであった。アメリカ議会での演説、そしてマス・メディアへの頻繁な登場によって巻き起こった「宋美齡旋風」は、大戦中のアメリカ世論を親中国へと導いた。そして、この「宋美齡旋風」とともに、

ルースのタイム社が創り出したのは、異民族の侵略に抵抗し、知恵に満ち、苦難を耐え抜いてきた不屈の精神の持ち主としての「中国」である。この「中国」は、アメリカ国民の同情と敬慕を集めることになる。アメリカにおける「中国ブーム」は、宋美齡の訪米を転機として、大きなクライマックスを迎えようとしたのである<sup>(45)</sup>。

ところが、バック夫妻の*Asia*は、ルースのタイム社のように、蒋介石夫妻、および宋美齡訪米を大々的に報道はしなかった。それだけではなく、バック自身は、タイム社を中心とするアメリカのマス・メディアによる、蒋介石夫妻についての過熱した報道に対して、むしろひややかな姿勢を取っていた。それは、彼女が1943年5月10日、*Life*に寄せた“A Warning about China”という文章からも見て取れる。

とはいえ、バック夫妻は、蒋介石夫妻の肖像を、*Asia*の1939年1月号の表紙として飾ることにした<sup>(46)</sup>。また、39年11月号と41年4月号、11月号の*Asia*は、蒋介石による軍事学校卒業式の視察や、38年、重慶訪問中のインド国民会議派議長のネルーやジョンズ・ホプキンス大学教授のオーエン・ラティモアらと蔣との会見に関して、写真入りの記事を掲載した。宋美齡についても、*Time*、*Life*およびその他のアメリカの主要な新聞・雑誌とは異なり、*Asia*は、蒋介石夫妻のキリスト教信仰、蔣に対する宋美齡の影響、宋の美貌、気品、そして、米国教育によって培われた洗練された英語などには着目しない。むしろ、孤児救済委員会の会長としての、戦争孤児のための応援活動といった社会福祉（バック自身の関心分野）における宋美齡の活躍と役割を特化して報道していたのである<sup>(47)</sup>。

訪米中の宋美齡は、アメリカの国会や母校のウェルズリー女子大、およびニューヨーク、シカゴ、ロサンゼルスなどの全米各地で、様々なスピーチを行ってきた。それらの講演の中で、彼女が最も多く使っていたのは、“people (s)”という言葉であった。例えば、彼女が1943年2月18日、アメリカの下院で行ったスピーチの冒頭にある“In speaking to Congress I am literally speaking to the American people”（下線は引用者による、以下同じ）という一文からも窺えるように、この言葉は、宋美齡がアメリカ議会をはじめ、全米各地で行ったスピーチのキーワードであった。例えば、下院でのスピーチを引こう。

We of this generation who are privileged to help make a better world for ourselves and for posterity should remember that, while we must not be visionary, we must have vision so that peace should not be punitive in spirit and should not be provincial or nationalistic or even continental in concept, but universal in scope and humanitarian in action, for modern science has so annihilated distance that what affects one people must of necessity affect all other peoples.

（私たちは、私たち自身と子孫のためにより良い世界を築き上げる手助けをするという特権を持った世代に属している。その私たちが肝に銘じるべきなのは、私たちは夢想家であってはならないが、夢を持っていなければいけないということである。そう

すれば、平和は、その精神において懲罰的なものにはならず、またその着想において、地域主義的にも国粹主義的にも、または大陸主義的にもならないだろう。平和が及ぶ射程は世界的でなければならず、行動において人道主義的でなければならぬ。なぜなら、近代科学があらゆる距離を無化したため、一国民に影響を及ぼす事柄は、必然的に、他のすべての民族にも影響を及ぼすようになったからである。) (48)

以上の事前に入念に準備した下院での演説と比べ、上院での宋美齡のスピーチは即興のものである。彼女は、演説の冒頭で、まずアメリカと中国との友好関係の歴史が160年にも及ぶこと、両国民の間に多くの類似点のあること、そしてそれらの類似点が、米中両国の友好関係の基礎となっていることなどを強調している。その上で、自身の留学経験も踏まえて、聴衆が親しみやすい以下のような日常的英語を使い、文も短くしたお蔭で、より強く、聴衆の心を捉えることができたと思われる。

I came to your country as a little girl. I know your people. I have lived with them. I spent the formative years of my life among your people. I speak your language, not only the language of your hearts, but also your tongue. So coming here today I feel that I am also coming home.

(私は皆さんの国に小さな少女の頃にやってきました。私はこちらの国民の皆さんを知っています。彼らとともに暮らしていたのですから。私は、人格形成期をこちらの国民の皆さんとともに過ごしました。私は皆さんの言葉を話します。それは皆さんの口から出る言葉だけでなく、皆さんの心からの言葉でもあるのです。ですから、今日、ここに来ることは、私にとっては、まるで家に帰ってきたような気分でもあるのです)。(49)

宋美齡のスピーチは、ラジオを通して全米に放送され、ルーズヴェルト大統領をはじめ、アメリカの多くの大物政治家から一般の国民まで深く感動させるほどの大成功を収めた。そして、バックの心をも強く惹き付けたのである。というのも、国、人種、政治体制を超えての国民の交流こそ最も重要であるという宋美齡の訴えは、バック夫妻の「東西協会」の趣旨とぴったり合致していたからである (50)。1943年の初期から、宋美齡訪米の講演集や、エミリー・ハーン Emily Hahn (1905-97年) の執筆した宋氏姉妹の伝記などについての広告が、*Asia* の誌面を何度も飾るようになった。と同時に、ジョン・ディ社も蒋介石夫妻のそれぞれの講演集を出版し、バックは、43年5月号の*Asia* の書評欄においてこれらの講演集を紹介している (51)。

まさに宋美齡訪米によって、アメリカ国民の間で盛り上ったこのような親中国ブームの中で、バック夫妻の「東西協会」は、米中両国民による手紙交換のプロジェクトを立ち上げ

た。そして、林語堂とその家族は、このプロジェクトを実行したのである。従って、戦時中の林語堂の英文著述が、アメリカも含む英語圏の国々で好意的に受け入れられた重層的な理由の中には、バック夫妻からの手厚い応援や、1935年、ロンドンで開催された中国芸術国際展覧会<sup>(52)</sup>のほかに、ルースのタイム社による「良い中国像」の創出もあったのではないかと思われる<sup>(53)</sup>。

## 結び

以上、渡米後の林語堂とバック夫妻を中心としたアメリカの文芸界の人々との交流を、*Asia*、ジョン・ディ社、「東西協会」での彼の文化的・社会的な活動を通して検証してきた。ここで検証した1936年8月から戦後にかけての*Asia*その他での文筆活動は、戦時中の英語圏における林語堂評価——「あらゆる時代における最も独創的、魅力的な東方智者の一人」、「中国とアメリカン・ライフの評論家」、あるいは「西洋に対する古の中国の解説者」<sup>(54)</sup>としての評価——を高めた重要な要素の一つだと考えられる。また、このような社会的な活動への参加が、*The Importance, Moment in Peking, Wisdom of China and India*などの力作にも結びついたのでないかと思われる。

## 〔注〕

- (1) 林とバックとが会おう経緯、および同じ家庭と教育の背景に基づく両者の思想上の親和性については、拙論「林語堂とパール・バック——*The China Critic*での交流を中心に」（『比較文学研究』第88号、2006年10月、105-21頁）を参照されたい。
- (2) Lin Yutang, *My Country*, New York: John Day, 1939, p. vii.
- (3) 林語堂「關於『吾国与吾民』」『宇宙風』第49期、1937年10月16日、30-31頁。
- (4) 合山究氏の調査によれば、林は、1936年11月6日から翌年の12月までの約1年余りの間に、*New York Times*に20回以上登場し、同紙を中心として少なくとも8種類以上の米国の新聞や雑誌に、中国の政治・社会・芸術・文化など様々な問題についての記事や論文を寄稿した。メディアでの活躍は、林の英文著述の人気を高めるのに繋がる相乗効果があった。筆者はこれを渡米後の林の文学・文化活動の重要な一環として捉え、別稿で詳論する予定である。詳細は、合山究「全盛期の林語堂——アメリカにおける圧倒的な成功」（樋口進先生古稀記念論集刊行会編『中国現代文学論集』福岡中国書店、1990年）195-98頁を参照されたい。
- (5) Pearl S. Buck, *My Several Worlds: A Personal Record*, New York: John Day, 1954, pp. 372-76.
- (6) *Asia*については、以下の主な先行研究を参照した。
  - ① Nora Stirling, *Pearl S. Buck: A Woman in Conflict*, New York: New Century Publishers,

- Inc., 1983, pp. 105-11, 146-49, 152-56, 205-26.
- ② Peter Cohn, *Pearl S. Buck: A Cultural Biography*, Cambridge and New York: Cambridge University Press, 1996, pp. xv, 82-97, 101-32, 152-99, 202-27, 231-46, 257-97, 304-31, 371.
- ③ 陳敬著『賽珍珠与中国——中西文化衝突与共融』天津: 南開大学出版社, 2006年, 126-39頁。
- (7) 例えば, 陳敬の前掲書は, *Asia* やジョン・ディ社での林の執筆・出版活動へのバック夫妻の支援を他の先行研究より詳しく考察している。しかし, 夫妻からの応援に, 林がどのように答えたかは述べられていない。詳細は, 陳敬前掲書の126-39頁を参照されたい。
- (8) 米国帰国前のバックが同誌に寄稿した文学作品の代表的なものは年代順に, “A Chinese Woman Speaks,” *Asia*, April 1926, pp. 304-10, 356-57; “A Chinese Woman Speaks,” May 1926, pp. 413-19, 444, 446, 448, 450-52; “The Revolutionist,” September 1928, pp. 685-89, 752-57 等がある。
- (9) レオナード・エルムハースト Leonard K. Elmhirst (1893-1974年) は, 英国の農業学者であり, また, 郷村建設・郷土教育の提唱者・実践者でもある。ケンブリッジ大学やコーネル大学で歴史学や農学を学んだ後, 1913年, アメリカで出会った印度詩人・タゴールの秘書として, 1923年から25年まで, 彼とともに, ヨーロッパ, 南米, そして中国, 日本を歴訪した。後に, ストレイト未亡人と結婚し, 夫婦で*Asia*の経営に携わった。エルムハースト夫妻に関しては, 以下の資料や先行研究を参照されたい。
- ① Leonard K. Elmhirst, “Personal Memories of Tagore,” in *A Century Volume: Rabindranath Tagore 1861-1961*, ed. Jawaharlal Nehru, New Delhi, 1961, pp. 12-26.
- ② Stephen N. Hay, *Asian Ideals of East and West: Tagore and His Critics in Japan, China, and India*, Cambridge, Massachusetts: Harvard University Press, 1970, pp. 146-85.
- ③ Michael Young, *The Elmhirsts of Dartington: The Creation of an Utopian Community*, London and Boston: Routledge & Kegan Paul, 1982.
- ④ ダーティントン・ホール・トラスト, ピーター・コックス編/藤田治彦監訳『ダーティントン国際工芸家会議報告書——陶芸と染織: 1952年』京都: 思文閣出版, 2003年。
- (10) Pearl S. Buck, *My Several Worlds*, pp. 372-76. 日本語訳は, パール・バック著/吉武好孝・新庄哲夫訳『私の歩んだ世界』(現代アメリカ文学全集15, 荒地出版社, 1958年), 214-15頁に拠るが, 引用に際し個別の言葉を書き換えた箇所がある。
- (11) Richard Walsh, “Editor’s Note,” *Asia*, January 1934, p. 64.
- (12) Pearl S. Buck, *My Several Worlds*, pp. 372-73.
- (13) “ASIA’S OWN HALL OF FAME,” *Asia*, February 1941, backpage.
- (14) この広告には, 林の著書だけではなく, バックが序文を寄せて, 同じくジョン・ディ社から出された林の娘たちによる日記風の*Our Family*も紹介されている。*Asia*, December 1939, p. 2.
- (15) *Asia and the Americas*, April 1943, p. 326.
- (16) 林の著述について, *Asia*の書評欄に掲載された代表的な書評は年代順に, Pearl S. Buck, “My

- Country,*” *Asia*, October 1935, p. 635; “*The Wisdom of Confucius,*” September 1938, p. 566; “*Moment in Peking,*” December 1939, p. 722; Carl Van Doren, “*The Importance,*” January 1938, pp. 66-67; Florence Asycough, “*A Leaf in the Storm,*” February 1942, p. 7 等がある。
- (17) 「今月の推薦図書クラブ」の設立経緯、選考委員の構成および図書の選択方法等に関する詳細については、Charles Lee, *The Hidden Public: The Story of the Book-of-the-Month Club*, New York: Doubleday & Company, Inc., 1958, pp. 21-43, 72-73, 108-125, 170-72, 197-212 を参照した。
- (18) この点については、Charles Lee, *The Hidden Public*, pp. 35, 111; *I Believe: The Personal Philosophies of Eminent Men and Women of Our Time*, ed. Clifton Fadiman, New York: Simon and Schuster, 1939, pp. 67-70, 82-92, 179-97 等を参照した。
- (19) この点については、以下の先行研究や資料を参照した。
- ① 合山究前掲論文「全盛期の林語堂——アメリカにおける圧倒的成功」201-02 頁。
  - ② 林如斯「父は泣いていた——「北京好日」について」、林語堂著／佐藤亮一訳『北京好日』上、芙蓉書房、1972 年、9-12 頁所収。
  - ③ 林太乙著『林語堂伝』台湾：聯經出版事業公司、1989 年、155-56 頁、160-74 頁。
- (20) ドイツ留学経験があり、ドイツ語にも堪能な林は、米国到着後の 1937 年 4 月 15 日、ドイツ語圏からの亡命知識人を受け入れるために設立されたニューヨークの社会研究新学院(New School of Social Research) 主催のマン講演会に出席し、伝記作家のエーミール・ルートヴィヒ Emil Ludwig (1881-1948 年) などのドイツ語圏の知識人たちと親交があった。これは、林が『宇宙風』に寄稿した文章や晩年の回想録から窺える。詳細は、林語堂「自由並沒有死 (海外通信之三)」(『宇宙風』第 43 期, 1937 年 6 月 6 日) 259-300 頁, “Memoirs of an Octogenarian” (『華岡学報』第 9 期, 1974 年 10 月) p. 271 などを参照されたい。
- (21) Charles Lee, *The Hidden Public*, p. 111.
- (22) ジョン・デイ社については、Pearl S. Buck, *My Several Worlds*, pp. 350, 360; Nora Stirling, *Pearl S. Buck*, pp. 136-37, 146-51, 177-79, 200-15; Peter Conn, *Pearl S. Buck*, pp. xviii-xix, 159, 172-75, 211-26, 282, 318; 林太乙前掲伝記, 155-56 頁等を参照されたい。
- (23) ウェンデル・ウィルキーは、宋美齡 (1899-2003 年) 訪米を成功に導くまでの御膳立てをした親中派のアメリカ政治家の一人だったと言われている。彼は 1940 年、共和党から選出された大統領候補だったが、選挙戦ではルーズヴェルトに敗れた。1942 年秋、彼は世界一周の途上、ルーズヴェルト大統領の特別大使として重慶を訪れ、蔣介石 (1887-1975 年) 夫妻に会い、たちまち宋美齡の知性と美貌の虜になった。林語堂は、ウィルキーの著書 *One World* (New York: Simon and Schuster, 1943) について、好意的な書評を *Asia* の書評欄に寄せた。そして、1944 年 11 月、彼が亡くなった時、バックも、戦時中における彼の対中支援活動やそのリベラリズム、人道主義などを讃える追悼文を同誌に寄稿した。詳細は、“The Missimo: Madame Chiang Kai-Shek of China Returns to the American People,” *Life*, February 22, 1943, p. 38; Lin Yutang, “*One World*, by Wendell Willkie,” *Asia and the Americas*, June 1943, p. 381; Pearl Buck, “WENDELL WILLKIE,”

- November 1944, p. 521 等を参照されたい。
- (24) *Pacific Affair* 誌編集長を務めたラティモアは、この時、蒋介石の依頼を受けて、民国政府の経済顧問を引き受けるために、ジョンズ・ホプキンス大学教授を辞めて重慶に出発しようとした。詳細は、Paul Wohl, “An American Geopolitical Masterhand,” *Asia*, November 1941, p. 601; *Asia and the Americas*, April 1942, p. 327; *Life*, March 2, 1942, p. 80 等を参照されたい。
- (25) 実は、林は顧問委員会に加わっただけではなく、1943年11月、戦時中の重慶に帰った際、「東西協会」中国支部を立ち上げる企画さえ抱えていたことが、バックの記事からわかる。詳細は、*Asia and the Americas*, July 1943, backpage を参照されたい。
- (26) 「東西協会」の理事会と顧問委員会の人選については、*Asia and the Americas*, April 1942, p. 327 を参照されたい。
- (27) *Asia and the Americas*, May 1942, p. 402.
- (28) Lin Yutang, “Union with India;” Hu Shih, “India, Our Great Teacher,” *Asia and the Americas*, May 1942, pp. 146-50, 323.
- (29) *Asia and the Americas*, November 1943, p. 647.
- (30) リチャード・ウォルシュはこの組織の議長を務めており、署名のリストも、*Asia and the Americas* の1943年7月号の誌面に掲載されている。
- (31) この点について、詳細は、W. A. Swanberg, *Luce and His Empire*, New York: Macmillan, 1972, pp. 176-89, 200-203; Peter Conn, *Pearl S. Buck*, pp. xv, 31, 82, 263, 273-82, 318-27 等を参照されたい。
- (32) このリストは8項目に分けられて、林語堂、胡適、宋美齡、バック、スノーなどの米中知識人たちが*Asia*に寄稿した文章もその中に含まれている。詳細は、“BOOKS ABOUT AMERICANS FOR PEOPLE IN ASIA TO READ,” *Asia and the Americas*, May 1942, p. 326 を参照されたい。
- (33) *Asia and the Americas*, February 1943, p. 123; March 1943, p. 181.
- (34) “BOOKS ABOUT AMERICANS FOR PEOPLE IN ASIA TO READ: A Report by Pearl S. Buck,” *Asia*, October 1942, pp. 600-01.
- (35) 蒋介石は、一貫して国民政府軍事委員会委員長を務め、1938年に国民党総裁に就任した。1943年8月1日、国民党の元老、林森が亡くなった後、蔣は中華民国国民政府主席を兼任することになり、同年の9月に正式に国民政府主席に選出された。こうした経緯からすると、1942年11月から翌年の5月まで訪米した宋美齡が、米国の主要なメディア（注48参照）に“First Lady”と呼ばれたのは時期尚早だったかもしれない。
- (36) Pearl S. Buck, “Wanted: Letters to China,” *The East and West Association News in Asia and the Americas*, February 1943, p. 121.
- (37) WABC はNBC (National Broadcasting Company) の前身の一部。社名は “W American Broadcasting Company” の略称。“W” は元の創立者 Westinghouse Electric Corporation 社を指す。
- 一方、コロンビア放送網 (Nation-Wide Columbia Network) は、カナダ放送協会 (The Canadian



- Broadcasting Corporation) と提携しているため、CBS ネットワークで放送された番組は、アメリカに限らず北米大陸の全土をカバーできたという。林語堂が呼びかけたせいか、カナダ図書館顧問委員会 (The Canadian Library Council) は、中国をもっと良く知るための読書企画——「中国日記：読書リスト」China Diary: A Reading List をカナダでも立ち上げた。なお、戦時中、林の英文著述の人気がカナダにも広がった理由の一つは、上述した「今月の図書推薦クラブ」のカナダ支部の働きやラジオでの呼びかけであった。もう一つの重要な理由は、訪米中の宋美齡が1943年6月16日、カナダ議会でも演説を行った結果、対日抗戦中の中国国民に対するカナダ国民の世論を中国に有利に導いたということである。詳細は、“Canadians to Hear Her,” *The New York Times*, February 18, 1943, p. 8; *Asia and the Americas*, January 1944, p. 41; 石之瑜著『宋美齡与中国』(台湾: 商智文化事業股分有限公司, 1998年), 158頁, 166-67頁等を参照されたい。
- (38) この時、胡適の後任としてアメリカに赴任してきた駐米大使、魏道明 (1901-78年) 博士が「アメリカにおける中国クラブ」の名誉主席に選ばれ、その姉妹組織「中国におけるアメリカ・クラブ」American Clubs in China も中国で作られた。詳細は, Pearl S. Buck, “The China Clubs of East and West,” *The East and West Association News in Asia and the Americas*, May 1943, p. 309 を参照されたい。
- (39) 詳細は, 『大公報』1943年11月5日, 56頁; *Asia and the Americas*, October 1943, p. 602 等を参照されたい。
- (40) 「中国へ手紙を送る」企画の詳細については, *Asia and the Americas*, February 1943, pp. 121-22; May 1943, pp. 309-10; “Lin Yutang Is Back in China,” July 1943, p. 657; “Lin Yutang Carries America’s Message to China,” October 1943, p. 602; “Friendship through Message of Good Will,” December 1943, p. 698; January 1944, p. 40; “Letters from China,” March 1944, p. 137; “China Courier,” May 1944, p. 232 等を参照した。
- (41) この点については, Lin Yutang, “Memoirs of an Octogenarian,” pp. 271-75; 林太乙前掲伝記 152 頁等を参照した。
- (42) 戦時中の駐米大使としてアメリカに赴任した胡適の日記には、1942年の後半から43年の初期まで、宋美齡が訪米した際、ルースが主催し、アメリカの政治界・経済界・文化界・教育界などの要人たちが集まった集会で、よく林語堂夫婦を見かけたという記述がある。また、銭鎖橋の論文によれば、林は1940年5月、戦時中の重慶に戻った際、初めて蒋介石夫妻に会った。以来、宋美齡との間に英語による親しい文通が始まったという。例えば、1941年4月21日付けの宋美齡宛ての手紙で、林は、ルース夫妻の重慶訪問を伝え、ルースの周囲の人間関係を紹介した。また、ルースが宋美齡の訪米を要請することを知らせ、宋美齡にいろいろとアドバイスを与えた。ここからも、林とルースの親密な関係や、ルースと宋美齡の訪米を取りまとめる上で、林が重要な役割を果たしたことが窺われる。こうした林とルースの交友関係は、スワンバーグの前掲書によっても裏付けられる。このため、戦中から戦後にかけて *Time* は、林の英文著述を称讃する書評を多く掲載した。詳細は、以下の資料を参照されたい。

- ① *Time*, November 29, 1937, pp. 69-70; November 20, 1939, p. 86; January 29, 1945, p. 102.
  - ② 『胡適日記全編』1940年3月16日, 3月31日, 1941年1月2日, 1月5日, 1942年1月15日, 1943年1月8日, 1月10日, 3月4日(曹伯言整理『胡適日記全編』八, 合肥:安徽教育出版社, 2001年, 560-61頁, 572頁所収)。
  - ③ W. A. Swanberg, *Luce and His Empire*, p. 186.
  - ④ 銭鎖橋「林語堂眼中的蔣介石與宋美齡」『書城』2008年2月号, 44頁。
- (43) ルースによる「良い中国像」の創出は、タイム社の制作になるラジオ番組やニュース映画「マーチ・オブ・タイム」以外、主に以下のアメリカの主要な新聞や雑誌を通して実行された。
- ① *Time*, October 26, 1931, coverpage; December 11, 1933, coverpage; October 5, 1936, p. 21; November 9, 1936, coverpage, pp. 18-20; December 28, 1936, pp. 13-15; January 4, 1937, pp. 18-19; January 11, 1937, p. 77; February 15, 1937, pp. 26-27; March 1, 1937, p. 21; March 22, 1937, p. 24; January 3, 1938, coverpage, pp. 14-16; January 5, 1942, pp. 13-14, 20-21; June 1, 1942, coverpage, pp. 20-21; March 1, 1943, coverpage, pp. 9-10, 23-26, p.28; March 15, 1943, p. 17.
  - ② *Life*, Henry R. Luce, “China to the Mountain,” February 17, 1941, pp. 61-65; June 30, 1941, coverpage, p. 11, pp. 82-86; “Wendell Willkie Meets the Chiangs in Chungking,” October 26, 1942, p. 39; Theodore H. White, “Chiang Ksi-Shek: The Leader of Fighting China Plays a Commanding Role in the Allied War Effort and the Destiny of Asia,” March 2, 1942, pp. 70-80; “The Missimo Madame Chiang Kai-Shek Returns to the American People,” February 22, 1943, pp. 35-38; “Speech to Congress: Madame Chiang Kai-Shek Calls upon the U. S. to Join China — in War and in Peace,” March 1, 1943, pp. 26-27; Frank McNaughton, “Mme. Chiang in the U. S. Capitol,” March 8, 1943, pp. 11-12, 14, 16; “Mass Tributed to Mme. Chiang,” March 15, 1943, pp. 26-27; “Madame Chiang in Hollywood,” April 19, 1943, pp. 34-37.
  - ③ *The New York Times*, December 9, 1941, p. 65; February 18, 1943, p. 78; February 18, 1943, pp. 1, 8; W. H. Lawrence, “Mme. Chiang Asks Defeat of Japan and House Cheers,” February 19, 1943, pp. 1, 4.
  - ④ Mayling Soong Chiang, “First Lady Speaks to the West,” *New York Times Magazines*, April 18, 1942, pp. 35-36; Eadem, “China Emergent,” *The Atlantic Monthly*, May 1942, pp. 533-37.
- (44) 筆者の調査によれば、蔣介石の肖像が *Time* と *Life* の表紙を飾ったのは、両誌合わせて7回にわたる。夫妻ともに *Time* の表紙を飾ったのは2回であり、宋美齡の肖像だけが *Time* と *Life* の両誌の表紙を飾ったのは、3回にも上る。詳細は、1926年9月20日付の *Time* の表紙のほかにも、上記の注(43)の①②の *Time* と *Life* を参照されたい。
- (45) 宋美齡訪米とルースによる「良い中国像」の創出が、いかにアメリカの輿論を親中国へと導いたかについては、主に以下の先行研究を参照した。

- ① W. A. Swanberg, *Luce and His Empire*, pp. 6-7, 94, 176-93, 200-27, 247, 277-78, 335, 452.
- ② Patricia Niels, *China Images, In the Life and Times of Henry Luce*, Savage, Maryland: Rowman & Littlefield Publishing Inc., 1990, pp. 35-83, 153-62, 191.
- ③ T. Christopher Jespersion, *American Images of China, 1931-1949*, Stanford, California: Stanford University Press, 1996, pp. 11-44, 59-107.
- ④ 石之瑜前掲著『宋美齡与中国』136-286頁。
- ⑤ 郭洵澈「亨利・芦斯与抗战期間中国新形象的創造」『民国档案』1999年第4期, 76-82頁。
- ⑥ 馬若孟・蔡玲「西方之旅：蔣夫人宋美齡美国演說行程（一九四三年二月十八日至四月五日）」, T. Christopher Jespersion「彼此瞭解：一九三〇与一九四〇年代蔣夫人对中美關係的影響」, 秦孝儀主編『蔣夫人宋美齡与近代中国學術討論集』台湾：(財) 中正教育基金会出版, 2000年, 298-332頁。
- ⑦ 馬曉華「アメリカの世紀と中国——大戦期タイム社の中国報道を通じて」油井大三郎・遠藤泰生編『浸透するアメリカ, 拒まれるアメリカ——世界史の中のアメリカニゼーション』アメリカ太平洋研究叢書, 東京大学出版会, 2007年, 229-49頁。
- (46) *Asia*, January 1939. この号の表紙の蔣夫妻の肖像は本物の写真である。しかし, *Time* の1938年1月3日号の表紙を飾った蔣夫妻は, 人物の衣服やポーズから, アメリカ人画家がこの写真に基づいて描いた肖像画と思われる。写真と比べると, 背景にある中国の山川などの風景が消され, 逆に蔣夫妻の睦まじい様子がより強調されているのも, 興味深い点である。
- (47) 例えば *Asia* は, 宋氏三姉妹そろっての戦争孤児院訪問, 宋美齡と戦地女子救護隊員との交流などを写真入りで紹介し, また, 宋がアメリカで出版した本の売り上げを, 戦争孤児救済のために設立した基金へ寄付するなどといった, 彼女の社会福祉活動に重点を置いて報道している。詳細は, *Asia*, November 1939, p. 663; May 1941, p. 157; November 1941, p. 601; *Asia and the Americas*, February 1943, p. 120 等を参照されたい。
- (48) “Text of the Two Addresses before Congress by Mme. Chiang Kai-Shek: China’s First Lady Reports of Situation in Her Homeland,” *The New York Times*, February 19, 1943, p. 4. 日本語訳は引用者による。
- (49) *Ibid.*, p. 4. 日本語訳, 同上。
- (50) バックは「東西協会」設立宣言の中で次のように述べている。Today East and West are one. War has swept the peoples of the world together and whether we are ready for this union or not, we have been forced to it by necessity. The union will continue, whether we want it or not, after the war is over. Not the western peoples alone will make this war, nor will western peoples alone make the peace after the war. For the first time in human history the whole human race must shape the world. “East and West Are One,” *Asia and the Americas*, May 1942, p. 327. この内容は, 宋美齡のアメリカ議会での演説と驚くほど似ており, 宋とバックは, アメ

リカとアジア諸国の一般国民のあいだでの交流を深めることが重要であるという共通の考えを持っていたことが浮かび上がる

- (51) 詳細は, *Asia*, May 1941, p. 263; *Asia and the Americas*, March 1943, p. 189; May 1943, p. 319; July 1943, coverpage; September 1943, p. 559; June 1944, p. 287; October 1944, p. 478 等を参照されたい
- (52) この展覧会開催の様相, およびそれによって盛り上った中国文化ブームについては, 拙論「ロンドンにおける中国芸術国際展覧会と英国知識人の中国伝統文化理解 —— ローレンス・ビニヨンとアーサー・ウェイリーを中心に」(『比較文學研究』第94号, 2010年1月, 95-115頁)を参照されたい。
- (53) 馬曉華と郭洵澈の調査によれば, *Time* の発行部数は, *My Country* が出された 1935 年には 45 万部, *The Importance* が出された 37 年には 60 万部を超えた。*The Wisdom of Confucius* が出された 38 年には 70 万部に達し, *Wisdom of China and India* が出された 42 年の 7 月には, 遂に 100 万部を突破した。*Life* は, 林が渡米した 36 年に創刊され, 二年後の 38 年, 全世界で既に 1,730 万の読者を有する人気雑誌となった。一方, *Fortune* は, 一般読者向けではないものの, 37 年の発行部数は 10 万部を超えたという。このように, 1930 年代の後半に入ると, この 3 誌のお蔭でタイム社はメディア帝国にのし上がり, アメリカ人の中国認識の構造を構築する上で大きな影響力を発揮するようになった。詳細は, 馬曉華前掲論文 (232-33 頁) と郭洵澈前掲論文 (77 頁) を参照されたい。
- (54) この点については, Chan Wing-Tsit, “Lin Yutang, Critic and Interpreter,” *College English* 8, No. 4, June 1947, pp. 163-64; *Wilson Bulletin* 11, No. 5, January 1937, p. 298; William Dubois, “In and Out of Books,” *The New York Times Book Review*, August 22, 1954, p. 345; A. J. Anderson, Introduction to *Lin Yutang: The Best of an Old Friend*, ed. A. J. Anderson, New York: Mason / Charter Publishers, Inc., 1975, p. 3 等の資料を参照されたい。